



美濃の交代寄合衆

こうたいよりあいしゅう

細野 哲弘 みずほ銀行 顧問
(元 特許庁長官 資源エネルギー庁長官)

子供のころからのお城好きである。あちらこちらのお城を巡っては悦に入っている。江戸時代からの天守閣は全国で12しか残っていないが、中国・四国地方は、実にその半数を占め、「お城数寄」の熱い眼差しを浴びているエリアである。先ごろ、かねて探訪の機会を狙っていた四国の高知城、丸亀城を初めて訪れる機会があり、また山陰島根の松江城が5つ目の国宝として指定されたのは、ファンとして嬉しくもめでたい限り¹⁾。

それにつけても、わが地元・美濃のお城にはかねて不満である。美濃は、玄人筋には奈良・平安のころからの交通の要所として、素人筋でも戦国時代から関ヶ原の合戦頃までは英傑割拠、心躍る国盗りの地として話題に事欠かないのに、江戸時代初期以降どうも「パッとしない」のである。この美濃にはどうしてこの時代に立派な太守とお城がないのか……？

もちろん、大垣と加納（現岐阜市）には各々10万石で戸田氏、奥平氏²⁾が城持ち国主として配されてはいたのは承知しているが、当時の評価で石高54万石³⁾とされた美濃の地には、もっと格別の構えがあつてよかつたのではないかと……。子供心にずつ



加納城址

とそう思っていたし、そののち隣の親藩尾張とのバランスや戦国時代の「お騒がせ」⁴⁾ゆえに小規模分割統治が意図的に選択された経緯などを学ぶにつけても、ミーハー的な不満は消えることはなかった。

そんな折、浅田次郎著「一路」で、西美濃田名部郡の交代寄合表御礼衆・時坂左京太夫の参勤交代の物語に出会ったから、もう堪らない。なんと、江

1) 12の現存天守閣とは弘前、松本(*)、犬山(*)、彦根(*)、丸岡、備前松山、姫路(*)、松江(*)、丸亀、松山、宇和島、高知の各城。うち国宝であるのは、最近築城年を示す祈禱札が見つかり今年7月に国宝指定されたばかりの松江城を含め、(*)印の5城のみ。江戸期の一国一城令、明治期の廃城令により、相当数の城が姿を消した。それでも、太平洋戦争まではかなりの天守閣が残っていたが、大垣城、名古屋城、和歌山城、広島城、岡山城はじめ多くの国宝級名城が空襲により灰燼に帰した。

2) 大垣戸田氏は三河譜代の各地にある戸田一族の一つで代を重ねて明治期を迎えたが、奥平氏は家康長女(亀姫)の女婿信昌が上野から入ったが、四代にして継嗣が途絶え、以後大久保氏、松平氏、安藤氏、永井氏と城主が替わり、石高も変遷した。

3) 石高を単純に比較することには意味がないが、概して遠方の外様に大名家が多く、加賀藩(103万石)、薩摩藩(72万石)、仙台藩(62万石)などがその代表。譜代は御三家(紀州55万石、尾張62万石、水戸35万石)を別にすれば、比較的小碌の大名家が多く、美濃は大垣藩の10万石が最高で、八幡藩(4.8万石)、加納藩(3.2万石)、高須藩、岩村藩(いずれも3万石)などとなっている。

4) 個人的には稲葉山城(岐阜城)への思い入れが強いが、二階堂行政に始まるこの城の歴代城主は、齊藤道三・義龍・龍興三代、織田信長・信忠・秀信(三法師)三代など「不幸な最期」を遂げた者が多く、しかも岐阜の名前が「天下を狙う」ひそみに倣っていることもあり、天下人家康にしてみれば「気味が悪い」思いがしたのかもしれない。早々に廃城にして構築物は城下の加納城に移してしまった。残念ながら、今の加納城址は石垣を残すのみで、移築の構築物は残っていない。因みに、再来年は信長入城、岐阜命名450周年である。なお、斎藤義龍は父道三を長良川の戦いで討って家督を継いだ後、室町幕府の相伴衆となり、奇しくも「一路」の時坂と同じ左京太夫の官位を一時保持したとの記録がある。

戸城白書院帝鑑問詰め⁵⁾の7500石とり旗本で、しかも参勤交代してたんだって……！ そんな話聞いたことないが、事実ならスワなんという見識不足とばかりに「ミーハー素人歴史探偵」の好奇心をくすぐられ、やおら調べてみると……。さすがにそうした人物、地名は希代のストーリーテラーの創作と判明したが、わが美濃にも城持ち国主ではなく陣屋構えではあるが「それらしい貴重な家系」があることが判ってきた。本稿はそんな流れで知ることになった「瓢箪から駒」の地元美濃の歴史小話である。

まず、そもそも「交代寄合」とは何ぞや。要すれば、「参勤交代する上級旗本」のこと。

戦国時代までは実力がものをいう武断政治の時代。ところが大阪の陣、天草の乱以降は平和・平時の時代で、いわば管理社会。早急に諸々の文治制度が定められたが、従来の統治層の格式調整の過程で名称と格付けで綾が生じた。

一つは役職配分によるもの。平時の統一政府には以前ほどのポストが要らないので、旗本でも無役が珍しくなかった。輔職すべき役職に恵まれないが格式はある上級旗本を、「寄合」又は「寄合衆」と称した。もっとも、寄合というのは当初の家柄を示すものであり、末代まで無役であるとは限らないのは、後述の実例の示す通り。

もう一つは氏素性の分類によるもの。所謂大名というのは譜代、外様に拘わらず1万石以上を言い、徳川(松平)の直参家臣を旗本、御家人としたのはいいが、大名の家臣以外の1万石未満の武士も便宜的に旗本の範疇に入れてしまったのが、混乱のもと。これにより、もともと室町までの豪族の末裔や大名の資格を得られなかった主に外様の武将など、世が世であれば大名になったかもしれない統治層が旗本にされてしまった。これら「誇り高き氏素性」の家系は勝手に石高だけで決められた大名を意に介せず、中には大名なるものが参勤交代するなら、我も当然

に……と思うようになった者がいた。もともと参勤交代は「(幕府定義の)大名に限る」との明文はないので、慣例上それが定着し定期的に参勤「交代」するようになった寄合を「交代寄合」と称するようになったというわけ。そして格式・肩書社会の常で、より格式の高いものを「表御礼衆」というようになった⁶⁾。

こうした「旗本だけど、心意気だけは大名並み」が「交代寄合」であり「交代寄合表御礼衆」である。長い説明になったが、確かにこれだけ理解しないと判らない話はなかなか人口に膾炙されないはずである。しかし、そんな意気の高い家系が地元にもあるのなら、その意気に触れないわけにはいかない。

まず「交代寄合」から。全国で14家、4グループ⁷⁾あったとされるうちに美濃衆高木家がある。もともとは信長の配下にあったが、のちに家康から美濃石津郡、多良郡に所領を与えられ、2300石の高木西家を本家として、1000石ずつの同東家、北家が合わせて一家をなしていた。

この3家は2家と1家に分かれて、隔年で参勤交代をしたとされている。参府期間は約1か月と短かったが、それは小祿による経済力の限界という面もあったが、この一族は寄合なるも無役ではなく累代にわたり川普請奉行として活躍し、特に伊勢、美濃の土木工事の監督、見回りを本務としたことによる。か



西高木家陣屋跡

5) 江戸城に登城した大名、旗本が将軍に拝謁する順番を待つ控えの間(伺候席という)には、出自・官位に応じて、大廊下(将軍親族)、大広間(国持ち大名など)をはじめ、溜間、帝鑑間、柳間、雁間、菊間広縁の7種があった。因みに、戸田氏や文中後述の菅沼氏は帝鑑間詰めであり、美濃高須藩主は尾張藩連枝のゆえをもって3万石なれど大広間詰めである。(特技懇265号(2012.05)の拙稿「高須輪中の縁」を参照。)

6) 御礼衆の前につく「表」の意味については、将軍に廊下で通りすがりの拝謁しか許されない交代寄合衆(「御勝手御礼衆」とも云った)との対比で正式に将軍へのお目通りが叶う地位との意と考えられるが他方、儀典を司る高家のうち、現にその職に就いているものを「奥高家」、非役を「表高家」と称したことと同じで、圧倒的に多数であった非役の意もあつたのではないかとと思われる。

7) 交代寄合には、美濃、那須、伊那、三河の4グループがあり、四州(衆)と称された。これに上野岩村家、肥後米良家、美川松平家がそれに準ずる家とされた。また美濃明智の遠山家も一時交代寄合であったとされる。



西高木家陣屋の石垣

の宝暦治水にも従事し、薩摩藩士を監督した⁸⁾。さすがに土木の専門集団だけあって、現在の旗本西高木家陣屋跡には見事な石組みの跡が残されている。

「交代寄合表御礼衆」としては、美濃岩手（現垂井町）の竹中家がある。言わずと知れた秀吉の軍師、竹中半兵衛重治⁹⁾の家系である。半兵衛重治の息子の重門は秀吉に従って長久手、小田原に参陣した。関ヶ原の合戦では、当初西軍に組していたが井伊直政の仲介で東軍につき、幼馴染の黒田長政らとともに奮戦。さらに伊吹山で西軍の大將小西行長を捕縛するなど功を挙げて5000石を安堵された上、関ヶ原の戦没者供養のために追加1000石を領して、長く美濃の地にあった。垂井町の陣屋跡は重門以降のものだが、正面には半衛兵重治の立派な座像がある。

交代寄合表御礼衆は時代にもよるが20家あったとされ、完全に独立した領内統治権を有し、まさに「大名並み」の格式を誇った。中には2000石程度の家もなくはないが、出羽の生駒家8000石、三河の菅沼家7000石を筆頭に高禄の家が多く、竹中家の5000石はいわば表御礼衆家の標準的な規模である。

竹中家は幕末まで徳川家に忠誠を誓い、幕末の当主竹中重固^{しげかた}は若年寄並陸軍奉行を務めて鳥羽伏見、奥羽、函館まで戦い抜いた。函館で降伏し、「朝敵」ゆえさすがに新政府から領地没収、官位剥奪の処分を受けたが、明治に入っても士族の困窮を救うため、一平民として北海道殖産事業などに尽力した¹⁰⁾。

さきに「一路」を引用した。江戸と云う時代の武家のあり方を面白い視点で紹介していて大変興味深い。他方、「参勤交代とは合戦への参陣行軍と同様なり」として、到着期限厳守で古式ゆかしい行列を仕立てるという筋書きには、この物語の設定である黒船が来て騒然とする時代背景を考えると、やや跳んでる感がある。しかし、川普請を奉行するという職分を全うした高木家や最後まで幕府に添い遂げて武士の本分を貫いた竹中家の生きざまに接するとき、太平の世にあって武士の心得とは何か、士分の心意気とは何んであったのかを、しみじみと思い知らされる。



竹中家陣屋跡正面の竹中半兵衛重治像



竹中家陣屋跡

8) 河川が多く平坦な美濃平野に暮らす者にとって、江戸期の三川分流難工事である宝暦治水は忘れられない治績である。その紹介は特技懇265号(2012.05)の拙稿「高須輪中の縁」を参照。

9) 竹中半兵衛重治は播磨三木城の攻略中に肺病にて陣没したとされているが、竹中家陣屋の近くの禅幢寺に長男重門が移した墓がある。秀吉旗下での美濃攻略の際の活躍の一端は、特技懇274号(2014.09)の拙稿「墨俣の一夜城」を参照。

10) 竹中重固の官位は従五位下遠江守であったが、剥奪により無位となった。維新に際しての表御礼衆の進退は様々で、文中の生駒家をはじめ6家の当主は大名並とされて、のちに男爵に叙された。